

# R6 (2024) 年 共通テスト追試 『激書』

次の文章は、明代末期から清代初期の思想家である賀貽孫が著したものである。

とくおうハ ム だいヲものなり

秃翁好レ大者也。

秃翁は、雄大であることを好む者であった。

ノげんニ ハク ヨ いえス ニ

其言曰、「余家ニ泉海一。

彼の言葉にあることには、「私は福建省泉州の海辺に暮らしていた。

かいぎヨ イルニ みなトニ シオ ヒキテ ザル あたハ サルコトなり

海魚入レ港、潮退而ア不能レ去也。

(とある) 海魚が入り江に入ったところ、潮が引いて離れることができなかった。

メ ヨ チ ふきんヲ のぼリテ はしヲリ ニ

集ニ数百人一、持ニ斧斤一升レ梯 登ニ魚背一、

数百人を集め、おのを持って、はしごを伝って魚の背にのぼり、

しやくかつシテ ヌルモ コクヲ ウを もとヨリ シ そこなハルル

斫割 連ニ数百石一、魚故 無レ害。

切り取って数百石も列をなしても、魚は依然として、損害が無い(様子だ)。

しゆめニシテ レバ ひるがヘシ ヨラシ ヨ ゆうぜんトシテ ゆケリ

須臾 潮至、翻レ身揺レ尾、悠然 而逝。

しばらくして、潮が満ちてきて(魚の場所まで) 到達すると、身をひるがえして

尾を揺らし、ゆったりと落ち着いた様子で「非超然として意に介さず」去った。

おもヘラク だいナルハ ナシ オギタルハ「すグルモノ」 これヨリ「これニ」

以為 魚之大 者イ莫レ過レ此 矣。

思うに、魚で大きいものは、これ以上のものはない。

がうけつ の しもまた ごとキ ノノ のみ ト

A 豪傑之士亦若 二是魚一而已矣。」

豪傑の士も同様に、まさしくこの魚のよう(に雄大)だ」と。

嗟乎、秃翁則誠豪傑也。

ああ、秃翁こそ、本当に豪傑である。

然徒知一豪傑之能為一大、

しかし、ただ豪傑が雄大でいられることを理解しているだけで、

而不レ知二聖賢之能不一為レ大也。

優れた徳をそなえた人物が雄大以外にもなれることを知らないのだ。

B 不レ觀二之竜一乎。

このこと「雄大以外になれる聖賢のあり方」は、竜のあり方に見てとれないだろうか、いや、見てとれる。

及二其化一也、時為レ人焉、時為レ虫焉、

それ「竜」が変化する対象は、時には人間になり、時には虫になり、

時飄為レ葉焉、時擲為レ梭焉。

時には（ゆらゆらと）漂う葉っぱとなり、

時には投げ撃たれ（素早く動く）機織りの道具となる。

I 彼自有下所二以為レ大為レ小、為レ卷為レ舒者上、

彼「竜」が自在に大きくなったり小さくなったり、とぐるを巻いたり解いたり（様々に変化）するのは理由があるのに、

而人乃以二区区小大之形、瑣瑣卷舒之状一求レ之。

平凡な人々は、なんて小さくて取るに足らない大小の形や、些末な、巻いてわだかまっていたり、解いて体をのばしたりの状態をもとにこれ「竜」を捜し求める。

是 豈 知 二 竜 之 為 一 竜 哉。

これはどうして竜が竜である根拠〔＝竜および聖賢の本質〕を理解しているだろうか、いや理解していないはずだ。

禿翁 惟 其 欲 為 一 泉 海 之 魚 一。

禿翁は泉海〔＝福建省泉州〕の大魚（のように雄大）になろうと望んだ。

是 以 攬 禍 而 不 寧 。

これが原因で、禍〔＝思うに任せない状況〕に陥って、（人々から攻撃され、）安寧しない（で獄死した）。

使 二 禿 翁 不 為 魚 而 為 一 竜 。

（仮に）禿翁が大魚（のように単に雄大）ではなく、竜（のように一定したあり方にとらわれない自在な境地）であったならば、

世人 安 得 而 禍 之 也 哉。

世の人々は どうして（彼に）危害を加えることができたろうか、いや、できなかったはずだ。